

## 大辻隆弘の講演 黒岩剛仁

昨年（二〇一一年）の「歌壇」九、十月号に、前、後編の二回に分けて掲載された大辻隆弘の講演記録「斎藤茂吉の作歌法——『ともしび』から『白桃』まで——」が面白かった。

とは言うものの、「茂吉の助詞の使い方」という副題を付けられた前編を読んだ段階では、「大辻君らしい、よく整理された講演だな」と感じた程度だった。しかしながら、「茂吉の手帳」との副題の後編を読み、「よく調べられているな」と感服するに至った次第である。それぞれから、一つずつ例を挙げる。

・暖房して等身大の人形は朱色のコート今日ぞ着てゐる 『白桃』

大辻は、「変な歌でしょう。私は一読して笑ってしまいました」と述べ、助詞「て」に着目する。「て」という助詞は、普通主語を変えないので、マネキンが自ら歩いて暖房のスイッチを押した行ったように読めてしまうと言うのである。なるほど、確かに。他にも、「にて」「に」「つつ」などの助詞に関して、茂吉独特の用法を指摘していて納得させられる。

ただ、先にも記したように、より感服したのは、後編での手帳を始めとする様々な資料を用いることによる作歌状況の解説、推

理の方である。

・食物を与ふるときに狐等は実に驚くばかり吠えける 『石泉』

樺太での歌だが、手帳には「金高養狐場ヲ見ル」としか記されていない。次に大辻が注目するのは、この歌の作歌時期である昭和八年三月であり、その頃、茂吉は我孫子の柴崎沼に行き、雁を見て吟行をしている。その折の連作が『白桃』に収められており、〈下総をあゆみ居るときあはれあはれおどろくばかり雁なきわたる〉との一首も並んでいると指摘する。つまり、大辻が推察するのは、手帳の記述を見ながら樺太での歌を作っていた茂吉が、数日前の吟行での雁の鳴き声を援用しながら、狐の生態をさも実感であるかのように〈捏造〉したのではないか、ということである。最後に、大辻は次のように語っている。

（前略）茂吉は、作歌の現場において、ひとりの歌人として、非常に粘り強く、真剣に、過去の記憶と現在の感覚、自分の精緻な言語能力を、全力で総動員して言語化しています。そして、いかにもその場にリアルタイムで立っていたという「実感」を作りあげている。その過程の粘り強さ、したたかさこそが、「歌人・茂吉」の偉大さの中心である、ということですよ。

私はまだ参加できていないのだが、佐佐木信綱に関する研究会も始まり、これまで国会図書館や近代文学館へは行ったこともなかったという人たちもすっかりと調べ物をして発表し、成果が上がり始めていると聞く。今後の展開が楽しみである。